

分に異常さはなく、その世界にだけ興味をもつのであれば、その時代について研究する人だけが読めばよいようにも思う。しかしこの日記はそれ以外の人々にも読んでほしいように思う。その理由は次のところにある。

『泉佐野市史』が本書を紹介し、さらに本書が刊行されることによって、日根野・入山田村の地域に今住んでいる人々は、九条政基の土にまみれた四年間の自分の土地での生活を知り、大患山大井堰慈眼院の称が、政基の法名に因んだことを知ったであろうが、それ以前、今から四六〇年程以前に、その地に展開した、かくも異常な出来事を伝える記録も伝承も持っていない。しかし私はこの忙却の中に、異常さの渦中にあった農民が、実に正常な抵抗を試みて、ついに勝つたのだという気がしてならなかった。もの云わぬ農民に耳を傾けてほしい。これが本書を沢山人に読んでもらいたい私の理由である。(A5版 二四二頁 昭和三十七年三月 養徳社発行 定価七五〇円) (三浦圭一)

京都大学近世物価史研究会著 一五～一七世紀における

物価変動の研究

——日本近世物価史研究 一——

社会の移行過程を明らかにすることは、どの時代社会をとっても決してやさしいものではないが、中世社会から近世社会にかけてもまた例外ではない。中世における複雑な社会のあり方は中世史研究の一つの重要な課題であるが、応仁の乱を起点とする一五世紀後半からは、複雑な社会が統合整理される方向を示しはじめる。この過程での貨幣経済の問題は重要な研究上での比重を与えるもので、さきに宝月圭吾教授によって公刊された『中世量制史の研究』では、とくに商業界を中心にその分析が試みられた。ここに京都大学近世物価史研究会が編述した『一五～一七世紀における物価変動の研究』は、小葉田淳教授の巻頭の解説「通貨と量・権衡について」で、宝月教授の前書を部分的に補いながら、この時代の通貨と量・衡について教えられるところが多い。

物価表は金・銀・銭・米からはじまって武器類や日用品でありながら表として意味をな

さないほどの頻度のないものを除いた衣食住に関する百以上に及ぶ主として京都での名目を、一四五一年(宝徳三)から一六五〇年(慶安三)にわたって表にしたものである。本書はその物価変動を知るうえ貴重な資料であるが、その利用はそれにとどまるものではない。その一つは、ここにとりあげられた品目は、その時代の一般的な商品を示すということである。またこの表を概観して、一五～一七世紀を次の三期にわけられるのではないかと思う。

Ⅰ期 応仁～文亀年間

Ⅱ期 天正～慶長年間

Ⅲ期 元和年間以後

すなわち、本書の物価表中、もっとも詳細なのは米であり、売値、買値、相場などの分類がしてあるが、Ⅰ期は主として銭で取引されⅡでは金銀取引が増加し、Ⅲ期では全く銀取引である。それ以外の商品でも、Ⅰ期が銭勘定、Ⅱ期が銀勘定であることに変わりはないが、Ⅰ期が米取引となるものが多く、野菜類・調味料・果実類・酒・茶・油・燃料・農具・衣料・紙など概してそうである。農村の副産物、山間海浜の特産物、及び都市での製造

品など、広範な生産と消費の基礎をもっているものはこれに入る。しかし扇・縮羅・綾・

緞子・金襴・錦など高級な奢侈的商品は米と同様、銭勘定から銀勘定への漸次的変化があり、二期において特に米勘定をみないようである。これらの商品がとくに貨幣取引を必要としたことの实体については、今後の研究によって確定されねばならないことであるが、近世社会形成期における生産構造における都市的特質にも関連して、今後の課題を提供するのではないだろうか。

本書の内容紹介の素材はつきない。いずれにしてもこの時代の貨幣経済の位置を確かめるための基礎的な研究が、このような形で試みられたことは、今迄にその必要が痛感されながら、その困難さのために実現しなかったことを考えあわせて、研究会員の方々の地道な努力に對し敬意と感謝の念を禁じえない。職人の賃金表や一六五一年以降の物価表も準備中ときき、一日も早い完成を祈りたいものである。(B5版横組 一九一頁 昭和三十

年一月 京都大学文学部国史研究室内説
史会発行 頒価一、八〇〇円 送料一五〇
円) (三浦圭一)

紀伊統風土記

高野山之部 第一卷

紀州史研究における「紀伊統風土記」の占める史料の意義については、今さらここに揚言する迄もなからう。天保十年、紀州薄儒仁井田好古によつて完成された本書は、その綿密な史料調査、現状調査によつて、紀州史とくに藩政史の基本文獻をなしているのである。うち高野山部は、山僧道猷・得仁等が委嘱をうけて撰修にあたり、全七十七巻に及ぶ大部となつて、高野山の開創以来、堂塔伽藍諸法会の興廃、各院の来歴、大師以下累代校の略歴、その他学侶行人聖高野三派の成立・組織・諸行事・年中行事・寺領の沿革等々、高野山史の最大集成なのである。ところで本書の公刊は、明治四十三年の刊行にかかり、現在では殆んど入手するを得ず久しく研究者の不便をかこつていたが、このほどうち高野山部(旧版第二巻伊都郡之部に属する部分を含む)が全三巻の予定で高野山大学統真言宗全書刊行会より再刊が企図され、うち第一巻が刊行をみた。単式印刷により新たに本版をおこし、したがつてさらに誤植・また原典の引用誤り等はすべて訂正されている。印刷もまことに鮮明で、利用には一層便利になつてゐる。高野山史研究の進展のため、この再刊は大きな意義をもつものとして、ここに紹介する次第である。ところで本書は、若干の原史料を含むとはいへ、大部分はいわゆる著述なのであつて、天保年間と現在では高野山史の研究は飛躍的發展をとげていることはいうまでもない。高野山史研究のため、本書の再刊を喜ぶことは、同時に山史研究にとつてはまことに悲しむべき事態であるといわねばならない。つまり現段階での研究を集成した、統風土記段階を格段に推し進めた山史が待望されるのである。本書の再刊のためにつくされた高野山当局の努力に對して厚く敬意を表するとともに、併せてその努力を新山史の編纂にも進められんことを切望する次第である。

(B5版五八八頁 昭和三十七年三月 高
野山大学内統真言宗全書刊行会刊 定価
四、〇〇〇円) (熱田 公)